

いのちと生き方③「ごんぎつね」を語る(1)

国民的ともいえる物語

平成26年は新美南吉生誕100年にあたる年でした。南吉と言えはまず思い浮かぶのが「ごんぎつね」ですね。この作品の国語教科書での初出は、1956年(昭和31)の大日本図書「4-1」にさかのぼります。平成23年度からは日本文教出版が撤退し三省堂が参入し、他社と同様に「ごんぎつね」を採用しました。よって全社(現在は東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書、三省堂)での採用は昭和55年から続いています。年配層から現在の小学4年生に至るまで、実に半世紀を超えて広く学ばれ、親しまれている定番ともいえる教材です。また、1985年には「まんが日本昔ばなし」が番組10周年記念アニメ映画を製作しました。



たった一語で変わる物語のイメージ

「ごんぎつね」は、新美南吉によって1931年(昭和6年)、18歳のときに書かれました。原稿は鈴木三重吉によって手を入れられ、現在の姿になったといわれています。二つを比較してみるとかなりの違いがあります。例えば、原本は「納屋」となっているところでは「物置」に変えられています。ほぼ同じ意味の言葉ですが、物語のうえでは一言でイメージが大きく違ってきます。物置は「家庭の季節品や余った生活用品をしまいこんでおく所」「現代風」、納屋は「農家の農具置き場」「昔風」などをイメージします。貧しい兵十の生活ぶりでは、「納屋」がふさわしいと考えます。三重吉が「物置」としたのは、読み手(子ども)が、「納屋」ではわかりにくいからではと推察されます。しかし、三重吉は、最後の1箇所では校正ミスをしてしまいます。「兵十は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って…」この「なや」は「兵十は物置でなわをなっていました。」の物置のことですが、読者にとっては、別物(別の場所)かと混乱してしまいがちなところ。教科書と言えども三重吉の原文は変えられないのです。

「ごんぎつね」は、「子ぎつね」でしょうか。「小ぎつね」でしょうか。南吉が書いた原稿には「子ぎつね」とあります。ところが、教科書では「小ぎつね」となっています。ちなみに昔の教科書は「子ぎつね」となっていました。「子ぎつね」では「いたずら好きのやんちゃな子どものきつね」程度ですが、「小ぎつね」となると「ひとり者が孤独に耐えかねてつながりを求め、いらだち、自分の存在を認めさせたい心の表れとしての悪戯」というように深くなってきます。

この題材の学習のねらいは、「様子や背景、気持ちを想像して読む」ことです。文章全体を理解するだけでなく、上記の例のように一つひとつの言葉をしっかりと捉えることが大切と考えます。「一つの単語」(キーワード)から始まり、一文や小段落そして話全体に広げていくことも、一手法です。

きつねを愛した南吉

南吉はわずか29歳7カ月の生涯に、童話123編、小説57編、童謡332編、詩223編、俳句452句、短歌331首、戯曲14編、随筆等17編もの作品を残しました。本名は新美正八（しょうはち）。8歳の時に新美家の養子になるまでは渡辺正八といました。正八の名前は、父親が好きだった講談の豪傑、梁川庄八からとったといわれています。当初は兄の名前でしたが、生後わずか18日で亡くなったため、次男の南吉に兄の分まで強く生きてほしいと願って同じ名前がつけられました。東京外国語学校（現東京外国語大学）に入学し、英文学の勉強をしました。この時期、南吉はヨーロッパやアメリカの文学から多くのことを学びました。フランスの作家フィリップやロシアの作家チエーホフが好きで、アンデルセン、ドストエフスキーからも多くの影響を受けました。また、宮沢賢治や童謡の手ほどきを受けた北原白秋も尊敬していました。



南吉作品には、故郷の自然・風土・歴史がベースになっています。ごんぎつねにおいては、兵十のモデルが岩滑新田の江端兵重であったり、中山様（中山勝時）が家康の叔父で、子孫が岩滑に戻ってきて南吉は中山家によく出入りしていたり、権狐の名前の由来が岩滑の北にある権現山のきつねであったり・・・作品の多くがふるさとの岩滑を舞台にし、岩滑の方言や習慣を採り入れながら書かれています。きつねは、南吉の主な童話の中では11編の作品に登場します。代表的なものには「ごん狐」「手袋を買いに」「狐」「和太郎さんと牛」があります。キツネが持つ神秘的なイメージと子ギツネのかわいらしさを愛したのでしょう。南吉童話には、キツネ以外にも、牛や犬、デンデムシもよく登場します。南吉は動物園に行かないと見られないような動物はあまり描かず、身近にいる動物を好んで物語に登場させました。

南吉作品に見られる 滅びゆくもの

また、ごんぎつねは、南吉の心の影を反映したものと言えます。南吉は幼くして母を亡くし、やがて養子に出され、余りの淋しさに5ヶ月足らずで家に帰りました。この時の「耐え難い孤独感」と「人とわかり合いたいという切なる願い」がトラウマ（心の傷）になって、ごんに色濃く投影されています。南吉が、ごんを「小ぎつね」ではなく「子ぎつね」と表したのも、こうした幼少時の体験に基づくからでしょう。また、ごんは悲劇的な最期を迎えます。南吉は、母や兄のあまりにも若すぎる死に「命のはかなさ」を感じていたのでしょう。

南吉の人生は短く不遇にも関わらず、作品にはユーモアやほのぼのとした温かさのあふれるものも多く見られます。それらは南吉の表裏でもあり、故郷岩滑の自然や風土の温かさでもあり、晩年死を享受する南吉の無の境地・ユートピアの表れでもありました。作品を年代順に読んでいくと、その時その時の生き様や心のありようが反映されているようです。

南吉の病魔に冒され消耗しつつある肉体と精神、生と死の狭間で、南吉は作品作りに励みました。「おじいさんのランプ」「最後の胡弓弾き」「ごんごろ鐘」はいずれも「滅びゆくものの

はかなさ」を表現しています。しかし、南吉は滅びゆくもの感情的にとらえて終わるのではなく、再生や新たな希望の道も示しています。

「おじいさんのランプ」では、おじいさんはランプが電灯にとって代わられたとき、ランプ売りを捨てて本屋を始めます。「ごんごろ鐘」では鐘は献上されて戦争の爆弾に生まれ変わります。南吉の執筆活動も数年のブランクと復活期、さらには迫りゆく死を覚悟して、最後の力をふり絞り精力的に励んだ燃焼期がありました。「失意と再生・復活」は南吉の文学人生でもあったわけです。

「テンテムムシノカナシミ」 新見 南吉

イツピキノ テンテムムシガ アリマシタ。

アル ヒ ソノ テンテムムシハ タイヘンナ コトニ キガ ツキマシタ。

「ワタシハ イママテ ウツカリシテ 𠮟タケド、ワタシノ セナカノ カラノ ナカニハ カナシミガ イツパイ ツマツテ 𠮟ルテハ ナイカ」 コノ カナシミハ ドウ シタラ ヨイテセウ。

テンテムムシハ オトモダチノ テンテムムシノ トコロニ ヤツテ イキマシタ。

「ワタシハ モウ イキテ 𠮟ラレマセン」ト ソノ テンテムムシハ オトモダチニ イヒマシタ。

「ナンテスカ」ト オトモダチノ テンテムムシハ キキマシタ。

「ワタシハ ナント イフ フシアハセナ モノテセウ。ワタシノ セナカノ カラノ ナカニハ カナシミガ イツパイ ツマツテ 𠮟ルノテ」ト ハジメノ テンテムムシガ ハナシマシタ。

スルト オトモダチノ テンテムムシハ イヒマシタ。

「アナタバカリテハ アリマセン。ワタシノ セナカニモ カナシミハ イツパイテス。」

ソレチヤ シカタナイト オモツテ、ハジメノ テンテムムシハ、ベツノ オトモダチノ トコロヘ イキマシタ。スルト ソノ オトモダチモ イヒマシタ。

「アナタバカリチヤ アリマセン。ワタシノ セナカニモ カナシミハ イツパイテス」

ソコテ、ハジメノ テンテムムシハ マタ ベツノ オトモダチノ トコロヘ イキマシタ。

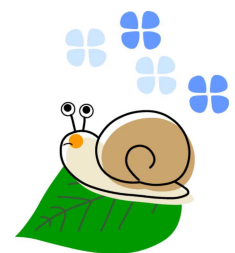
カウシテ、オトモダチヲ ジュンジュンニ タツネテ イキマシタガ、ドノ トモダチモ オナジコトヲ イフノテ アリマシタ。

トウトウ ハジメノ テンテムムシハ キガ ツキマシタ。

「カナシミハ ダレテモ モツテ 𠮟ルノダ。ワタシバカリテハ ナイノダ。

ワタシハ ワタシノ カ ナシミヲ コラヘテ イカナキヤ ナラナイ」

ソシテ、コノ テンテムムシハ モウ、ナゲクノヲ ヤメタノテ アリマス。



このように繊細で豊かな感受性を持った南吉は、自然や人間を深く観察する作家としての天性を持って作品づくりに励みました。作者の生き方や作品内容、物語の背景に触れることで、私達も心の豊かさや感受性を培っていければいいですね。いのちを大切にするとはい、生命だけではなく、生き方（生きる価値）に関わることです。ですから「命」ではなく「いのち」です。私達は草花や昆虫たちからもいのちを学び、ごんぎつね（新見南吉）からも学びます。

(参考資料:・新美南吉記念館 各資料 ・音読・朗読・表現よみの学校 荒木茂)